

**COMBAT**

コンバットマガジン

May,2019

No.518

5

015

**COMBAT SPECIAL ISSUE**

～少年たちをトリコにしたニッポンの玩具～

# モデルガン60

## 年史

構成：KEN NOZAWA、編集部 資料提供：稲葉秀雄

Cover Photo  
KEN NOZAWA  
© WORLD PHOTO PRESS 2019  
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

### CONTENTS

#### DA NANG AIR BASE 1968

空軍兵士のベトナムツアー

004 **ゲリー・ワグナーの日常**

010 第7回 **サイゴン物語** Saigon Memories

Long Bien Bridge in Hanoi

不死鳥ロンビエン橋

月刊 **THE グリーンベレー**

045 **GREEN BERET**

AFGHANISTAN 2014 ●文と写真/DJちゅう

東京マルイ

●Report by Tomo Hasegawa

052 **GAS BLOW BACK  
FNX-45 TACTICAL**

WESTERN ARMS

058 **WESTERN ARMS  
SNAKE MATCH1911**

WESTERN ARMS

061 **COLT M1911 GETAWAY  
VINTAGE EDITION**

The Equipments of the U.S. Force

064 **[現用米軍装備カタログ]**

'90年代特殊部隊装備特集SOE Part.1

速報!!

074 **2019 SHOT SHOW Part.2**

●Report by Muneaki Samejima

080 **5.11 TOKYO**

COMBAT Recommend item Vol.5

082 **ニッポンのカゴぶ** ●写真と文/菊池雅之

第2偵察隊 軽雪上車〈ケイセツ〉



086 シン・サバゲ三等兵  
おじさん達と行く、春のうらの房総半島

090 Militaria Roundup!  
**U.S. Caliber.30 M1ライフル**  
(M1ガーランド) Part3

096 NEW GENERATION STYLER by fujiwara

104 **トイガンニュース**

- WA ベレッタM92FS《ブルースチール・カスタム》
- WA M4A1 PDW《マグプル・カスタム》
- タナカ S&W M629《PCコンプハンターVer.3》
- タナカ コルトS.A.A.45 7-1/2inキャバルリー (2nd)  
デタッチャブル・シリンダー スチール・フィニッシュ

### COMBAT FRONT LINE

050 新作映画紹介 潜水艦映画プチ特集!!

- 106 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
- 108 サバゲ三等兵APS部 ヒゲのおじさん奮闘SP
- 110 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉徹
- 111 ゲームOTT『SEKIRO: SHADOWS DIE TWICE』
- 112 レアミリタリーテクノロジー
- 113 ツゲチョリ BAR HOPPER“P”
- 114 兵装嗜癖
- 124 PRESENT
- 125 CIC
- 126 バックナンバー
- 127 奥付&次号予告

COMBAT SPECIAL ISSUE

～少年たちをトリコにしたニッポンの玩具～

# モデルガン

# 60 年史

ガンを模した玩具でありながら  
弾丸の発射機能を有さない「モデルガン」  
その歴史は決して順風満帆とは言えず  
幾度も法的な規制を受けてきた  
それでも趣味として「モデルガン」は  
しっかりと根を下ろしている  
日本に「モデルガン」が誕生してから60年——  
日本で誕生した独自の玩具「モデルガン」とは何か？  
その核心を探る総力特集!



1959年に創刊し、'60年代の前半にガンマニアを楽しませた『ヒッチコックマガジン』。

日本のモデルガン史を振り返るとき、2019年の現時点で3つの時代に大別できる。いきなり3つに大別と記してしまったが、もちろん「5つか6つに分類できる」といった意見もあるだろうし「いや、2つだ」という説も出てくるに違いない。が、ここでは、時代・時代に発生したガンブーム（モデルガンブーム）の背景（要因）や法規制などを基に、3つに大別して話を進めることにしたい。

「モデルガン60年史」とのことなので、時系列に沿って第一次モデルガンブーム発生まで…。いや、まずはそれ以前の「モデルガンという新しい文化」が誕生する前まで遡らう。

日本でのTV放送開始は1953年だった。戦後8年。復旧と復興が進む中、近代化の波は着実に押し寄せ、わずかずつではあるものの国民が豊かさを感じ始めていた時代だ。とはいえ、発売当初のテレビの価格は29万円という、初任給の54倍

番組の中にカウボーイを主役としたドラマがあった。

1959年には「ローハイド」や「拳銃無宿」の放映がスタートしている。後に“カウボーイもの”や“ウエスタンもの”と呼ばれる それらのドラ



1960年代の初頭にガンマニアたちを熱狂させた輸入トイガンの数々。どれも高額だった。



こちらの広告を見ると、輸入トイガンの豊富さが分かる。大人たちが夢中になった。



実銃のメカニズム図や分解の手順も紹介された、本格的なガン関連誌だ。



『拳銃ファン』でのモデルガン記事。ガンの魅力が伝わる（『拳銃ファン』より転載）。

モデルガン業界内で発生した仲違いはモデルガンマニアにとって寂しい歴史の一コマではあるものの、関係各社には申し訳ないが購入側にはメリットも多くある。モデルガンの開発競争と価格の安定化がそれであった。事実、1965年以降、数年の内に多種多様のモデルガンが開発・製造・販売され、これをもって「第1次モデルガンブーム」と称される時代が到来した。

各社がどういったモデルガンを発売していったのかは年表を確認していただくとして、ここでは、もう少し時代の流れを追ってみたい。

ガンブームの発生はモデルガンの誕生へとつながり、新しい文化や趣味を創造したともいえるが、もう少し広く、一般社会にもガンブームはあったのか？ にも触れておこう。

1959年。週刊少年漫画雑誌の『週刊少年マガジン』が講談社から創刊されている。現在でも発行され続け、少年向け漫画誌として広く知られた存在だが、1960年代、その少年誌において何度もガン特集が、それも実銃特集が組まれていた。表紙にも大々的にガンが描かれ、昭和37年4月8日号にいたっては、表紙、「ニューナンブ回転式けん銃ができるまで」として、実銃のニューナンブリボルバーの分解写真を含めた4点の写真が大きく使われているのだ。そのままページを捲っていくと、表2からずっと実銃の解説が続くという徹底ぶり！ その解説の中には「けん銃のできるまで」が図解で説明されており、プライス盤や旋盤を使って金属を加工し、組み立てるといった流れが分かりやすく紹介されている。

昭和37年は1962年で、それは日本初のモデルガンが発売された年でもあるのだが、当時、すでに子供たちの間ではガン人気があったことが窺える。それを裏付ける



1960年代の少年マガジンでは何度も拳銃特集が組まれ、その人気窺える。

1971年のモデルガン法規制を境に、モデルガンの趣味から離れたマニアは少なくない。「これで日本のガンブームもモデルガンも消滅する」という声も多く聞かれた。確かに、モデルガンブームのひとつの終焉と呼べるのかもしれない。が、しかし、その法規制によってモデルガンは新たな方向性を見出し、別の形で発展を見せることになる。

その第2次モデルガンブームの幕開けである。

あったが、日本人の目には本格的かつ高級な存在として輝いた。当時の販売価格は3,000円ほどなので、これも現代の物価に換算すると3万円弱といった金額になる。文句なしに高級玩具であった。しかし、若者たちのガンに対する熱狂心は高く、強かった。それらの輸入玩具は爆発的な売れ行きを見せる。当時、多くの店舗はアメ横に店舗を構えて輸入玩具の販売を行っていたこともあり、後々「アメ横＝モデルガンマニアの聖地」という図式が成り立つこととなる。

まは、ここ日本で若者を中心に熱狂的なブームをおこす。主人公のカッコよさはもちろんだが、米国の豊かさや壮かさ、生

1962年。国産初のモデルガン、モーゼル軍用拳銃がホンリュー（後のハドソン産業）から発売となると、続けて同年、日本MGC協会（以下、MGC）はワルサーVP-II を発売する。ワルサーVP-II はMGCが作ったオリジナルのモデルではあったが、現代と比べると実銃に関するガンマニアたちの情報や認識は大きく不足しており、架空のモデルでありながらもリアルティ溢れるモデルガンとして受け入れられ、ヒット作となった。

ここで話は前後するが、発売時期だけを見ると、国産初のモデルガンはホンリューのモーゼル軍用拳銃で間違いがないが、そもそもモデルガンという言葉はMGCが創り出した造語である。その意味では、細かくはなるが、MGCが発売したワルサーVP-II が日本初の国産モデルガンとも、言えることになる。

1962年以降、モデルガンの製造も販売

# モデルガン史 1959-1971 好景気とウエスタンブームが生んだ「モデルガン」という新しい文化

という高額（現代の物価に換算すれば1000万円を超える）であったため、一般家庭が購入を考えるのは1959年以降となる。皇太子明仁親王（今上天皇）と正田美智子さま御成婚の様子がTV放映されることが切っ掛けとなり、それを観たいと願う気持ちから全国にTVが普及したのだ。

そのTV普及こそがガンブーム（モデルガンブーム）を起こす大きな仕掛けになろうとは、その時点ではまだ誰も知らない。

TVの普及が進むと当然ながらそこで放映すべきコンテンツが必要になる。各TV放送局は番組づくりを積極的に進めるものの、予算も制作のノウハウも充分でなかった黎明期の時代…。必然、海外で放映されていたTV番組（ドラマ）の輸入を手がけることとなる。そんな輸入TV

いろいろな拳銃の特徴を紹介している特集記事（少年マガジンより転載）。



『拳銃ファン』での特集記事。読物に近く、内容はハイレベルだ（『拳銃ファン』より転載）。

き方の自由さに日本の若者たちは魅了され、心に絶対的な憧れを宿したのだ。

1960年に放映開始された『ララミー牧場』は最高視聴率43.7%を記録した。やや大きめに表現するなら“カウボーイもの”“ウエスタンもの”の人気は日本国民のすべてを巻き込むほどの勢いがあったと言えるだろう。

そうなると自然とドラマで活躍する主人公たちへの憧れ（ある種崇拜とも言える状況であった）から、彼らが身につけているシャツ、パンツ、靴や帽子にも目が向く。そしてその眼差しは「悪を倒す正義の力」であるガンにも向けられた。

少しばかり余談となるが、1960年以降、貿易・輸入の自由化が進んだが、それは戦後の日本が本当の意味で豊かさを、復旧・復興を成し遂げたことの証とも言える。というのも、貿易（輸入）の自由化は海外からの関税圧力が関係しており、それは日本が国力を高めた結果だからである。外貨の流出を緩和できる段階まで来ていた。

話を戻そう。1960年に入ると海外からガンを模した玩具の輸入が本格的に始まった。それは子供向けの取るに足らないオモチャでは

“カウボーイもの”や“ウエスタンもの”といったドラマのヒットと1960年からの貿易の自由化の2つが車輪となり、空前のガンブームが発生したのだが、いつの時代にも人々は成長・発展を求める。輸入されたシングルアクションリボルバー・モドキは、始めこそ大歓迎されたものの、ガンマニア達は少しずつ物足りなさを感じ始める。また、輸入・販売よりも製造・販売の方がビジネス規模の拡大と安定を图れると考えた輸入業者が、自社製品の開発を意識するようになっていったのは自然の流れと言えるよう。

さらに加えて、1961年にはドラマ『アンタッチャブル』の、そして1962年には『コンバット!』の放映が開始されると、ガンマニア達はシングルアクションリボルバー・モドキだけでは満足しない、出来ないという状況も発生していた。



『拳銃ファン』に掲載されていた広告。シングルアクションリボルバー・モドキが人気だった。



結果、MGCの提案に反発した販売業者はMGCとの関係を絶ち組合を作る。それが「日本高級玩具小売商組合」だ。加盟したのは中田商店、丸郷商店、江原商店（後の東京CMC）、ホンリュー・コーポレーション（後のハドソン産業）、ホビーズ商会、国際ガンクラブなどであった。

1953年(昭和28年) テレビ放送スタート

1958年(昭和33年) ドラマ『ローンレンジャー』/コルト45』放映開始 / 小説『野獣死すべし』発表 / 映画『野獣死すべし』公開 / チキンラーメン発売 / 東京タワー完成

1959年(昭和34年) ドラマ『ローハイド』放映開始。テキサスからミズーリまでの約3,000kmを牛の大群を運ぶカウボーイの物語 / ドラマ『拳銃無宿』 / 少年ゼット』放映開始 / 皇太子明仁親王(今上天皇)正田美智子さま御成婚

1960年(昭和35年) 中田商店、アメリカ製マテル、ヒュープレー、ニコルス社製のキャップガン(通称、モナカ銃)を輸入・販売 / マノック産業、少年雑誌にキャップガンの通販広告を出稿 / 日本MGC協会、アメリカ製マテル社のキャップガンに造形を施し改良したスナプ・ノーズを販売 / ドラマ『ララミー牧場』放映開始。日本はウエスタンブームに沸く。最高視聴率は43.7% / ドラマ『解決ハリマオ』放映開始 / タカラが『タッコちゃん』を発売。大ヒット

1961年(昭和36年) MGC、国産初の薬莢が飛び出すコルトスーパーオートとマテル改良ブラックホークを販売。それらの製品に世界で初めて「モデルガン」と命名する。 / 中田商店、江原商店、丸郷商店、丸保コルト商会、ホビー商会、かなめや、明光産業、銀座銃砲店などに流通販売を開始 / トイガンデザイナー小林太三氏MGCに入社。トイガン設計開発者のスタートを切る / 小出書房より実銃と輸入キャップガンを紹介する『拳銃ファン』創刊。執筆者は根本忠、大藪晴彦、岩堂憲人、小橋良夫など / 江原商店、アメリカ製コルトピースメーカー(モナカ銃)輸入・販売開始 / 明光産業、東京渋谷と新宿にキャップガン(モナカ銃)専門店を開店 / ドラマ『アンタッチャブル』放映開始 / 人類初の有人衛星、ガガーリン飛行士を乗せた地球一周に成功 / 柏戸(第47代)、大鵬(第48代)が同時に横綱昇進

1962年(昭和37年) 本流(※後のハドソン)日本初のモデルガン、モーゼル軍用拳銃発売 / MGC、米国ヒュープレー製のコンダー改良モルコムT1911コマナダーを発売するも販売4ヵ月で販売禁止に / MGC、手动連発式スライト(アクション(通称タニオアクション))を搭載した国産初の金属製モデルガン拳銃型ワルサーVPIIを発売。引金を引くと遊底が運動し、装填・発火・排莢が楽しめる仕組みで人気を博す / 国際出版、月刊『Gun』誌を創刊 / 六人部 登氏、中田商店に入社。設計開発者の道を進む / ドラマ『コンバット!』放映開始 / アメリカ合衆国海軍、特殊部隊Navy SEALsを結成

1963年(昭和38年) 監視庁、玩具けん銃「コンドルレンジャー」を製造のコンドル工業を銃刀法違反容疑で検発。製造販売の中止と早期回収を命じ起訴する。後の1965年、東京地裁は、その威力、性能、構造からして致傷能力を有しないという理由で無罪判決 / MGC、国産初の金属製リボルバーS&Wチーフスベシアルを発売 / ケネディ大統領暗殺事件 / アニメ鉄腕アトム 放映開始 / 江崎グロコブリック』発売

1964年(昭和39年) MGC、国産初の全鉄製U.S.M-3グリースガン(無発火式)を販売。ゼンマイ動力によるフルオート機構を搭載。 / MGC、ユナイテッド映画会社と初のタイアップ商品としてワルサーPPK(タニオアクション)発売。『007は二度死ぬ』の日本ロケに多くのプロップガンを提供 / MGC、陸上自衛隊土浦駐屯地内の武器倉庫(後の武器資料館)を見学、開発資料となる実銃「ブローニングFN380」に触手。小林氏は実銃を分解、さらに全部品の写真撮影も許可されるという。現代ではとても考えられない古き良き時代だった / ドラマ『忍者部隊月光』放映開始 / カルビー「かつぱえびせん」発売 / 日本人の海外観光渡航自由化 / 第18回夏季オリンピック東京大会開催 / 東海道新幹線開業

1965年(昭和40年) 中田商店、無可動文鎮モデル、アストラモデル4、ルガーP08、ワルサーモデル4を発売 / MGC、ブローニング FN380、S&W センチリアル発売 / 警察庁は悪用防止策として18歳以上のモデルガン購入者に住民票の提出を東京都内の販売店に要請するも販売店は応じず、MGCは非協力店への製品供給を中止。後の「アメ横モデルガン戦争」となる / MGCから製品の供給を止められた上野アメ横商店群は「日本高級玩具小売商組合」を組織。金属製モデルガン(無可動文鎮モデル、MGCコピー品、その他)の製造を開始。製造は埼玉県川口市の丸真ダイカスト工業が請け負った / MGC、上野アメ横に直営のモデルガン専門店「MGCボンドショップ」を開店 / 丸真ダイカスト工業(後のマルシン工業)は中田商店と合併でモデルガン製造会社「東京工業株式会社」を設立し六人部 登氏がオリジナルモデルの設計開発を委託。工場長に根本 忠氏、社員に国本圭一氏が在職 / 映画『荒野の用心棒』日本公開 / ドラマ『0011ナホelsonソロ』放映開始 / 日本テレビ「おはよう!子どもショー」放映開始 / 大塚製薬「ロマンチック」発売 / サビートルズ来日

1966年(昭和41年) MGC、コルトGM、ルガーP.08、ワルサーP38アングルタイプ、ベレッタM1934発売 / 江原商店(後のCMC)、コルトGM(非発火式)、ベレッタM1934発売 / 国際ガンクラブ(後の国際産業)、S&Wチーフスベシアル(MGCコピー品)、コルトベストポケット発売 / 中田商店、ルガーP.08 / 4in. 8in. P.38コマースシャル 発売 / 丸郷商店、FN380(MGCコピー品)、ワルサーPPK(MGCコピー品)発売 / 本流(後のハドソン)、ワルサーPPK(MGCコピー品)、南部14年式販売 / TBS系「ウルトラQ」放映開始 / サンヨー食品「サッポロ一番 しょうゆ味」発売

1967年(昭和42年) MGC、コルトS.A.A コルトディテクティブスペシャル発売 / 中田商店、FNブローニングHP M1935、トカレフTT-33発売 / MGC、長野県軽井沢レークニュータウンで「モデルガンぶっ飛ばせ クイックロー大会」を開催。タイマーを設置し、コルトS.A.Aモデルを使用しての早撃ちを競う / トイガンデザイナー六人部 登氏、中田商店から独立し「六研」設立 / 映画『夕陽のガンマン』日本公開 / 森永製菓「チョコボール」発売 / FM東海(TOKYO FMの前身)でFM最長番組「JET STREAM」放送開始

1968年(昭和43年) MGC、2代目ワルサーPPK(タニオアクション)、コンバットマグナムリボルバー(S&W M19)、モーゼルHSC(タニオアクション)、ダブルレインジャー、ベレッタポケット、ワルサーP38ミリタリー発売 / MGC、国産初の玩具火薬でフルオートブローバック機構を開発。全鉄製サブマシンガンのシュマイザーMP40、ウインチェスターM73 同 M73オクtagon発売 / CMC、コルトGM1911-A1、コルトSAA発売 / 中田商店、エンフィールドNo.2 Mk1 シュマイザーMP40発売 / 国際ガンクラブ(後の国際産業)モーゼルHSC(タニオアクション)発売 / 本流(後のハドソン産業)モーゼルミリタリー販売 / マルコー、ブローニング M1910 コルトディテクティブ発売 / 六研、トンプソンM1A1、AK47販売 / アニメ『巨人の星』放映開始 / 漫画『ゴルゴ13』連載開始 / マーティンルーサーキング暗殺 / 3億円事件発生

# DANANG AIR BASE 1968

## 空軍兵士のベトナムツアー

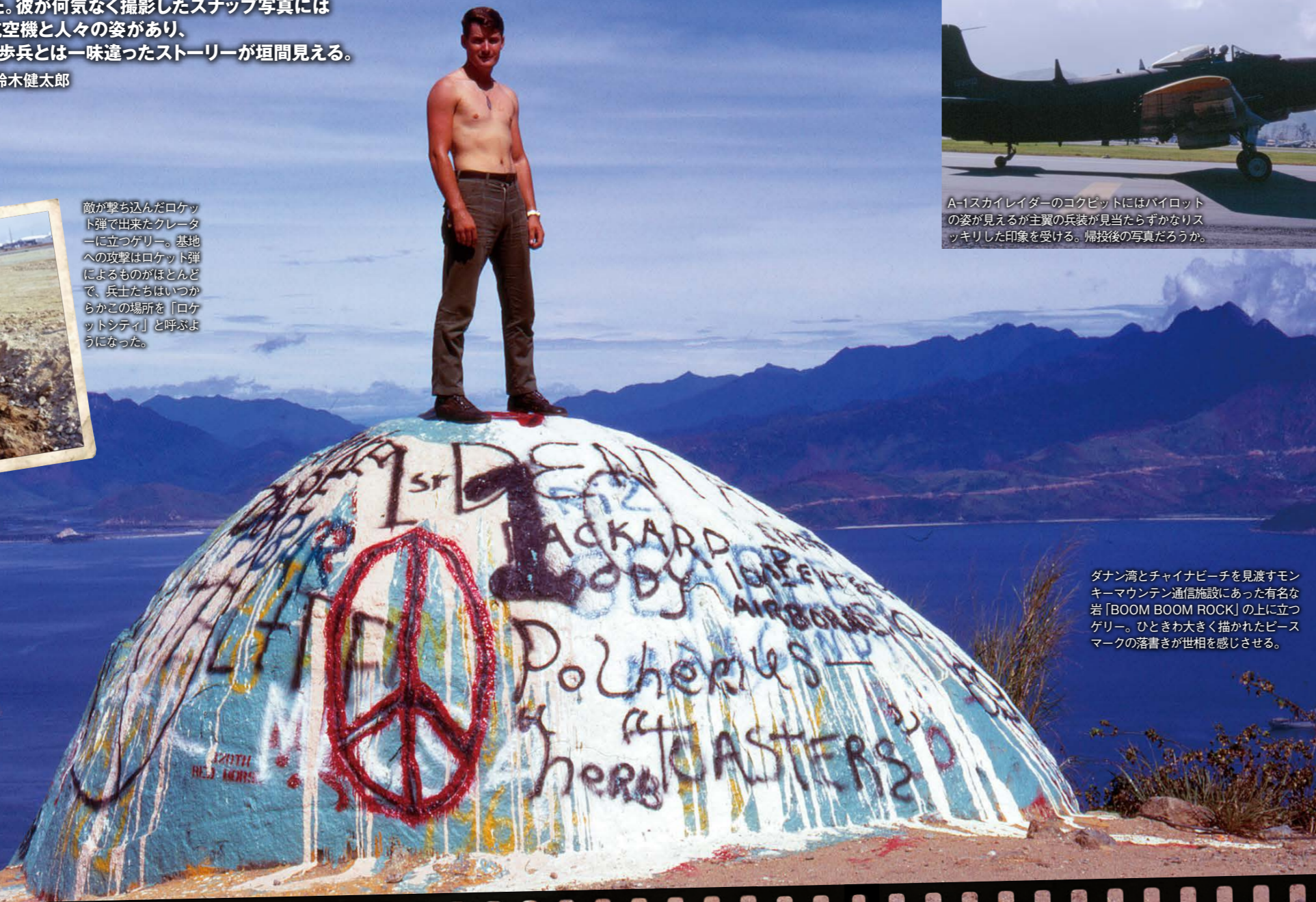
# ゲリー・ワグナーの日常

1968年に空軍兵士としてベトナムに従軍したゲリー・ワグナーはダナンの航空基地で仕事に追われ、敵のロケット弾に襲われながらも一年間のツアーを生き延びた。彼が何気なく撮影したスナップ写真にはダナンを歩き来する数々の航空機と人々の姿があり、ジャングルを這い回った陸軍歩兵とは一味違ったストーリーが垣間見える。

Photo/Gary Wagner 文/鈴木健太郎



敵が撃ち込んだロケット弾で出来たクレーターに立つゲリー。基地への攻撃はロケット弾によるものがほとんどで、兵士たちはいつからかこの場所を「ロケットンティ」と呼ぶようになった。



①基地内には「世界一おいしいソフトクリーム」をキャッチフレーズにしたデイリークイーンの店まであった。②夜間に打ち上げられる照明弾。敵は昼夜を問わず攻撃してくるので夜といえども気は抜けない。③ダナン航空基地の滑走路とハンガー（格納庫）の数々。航空機の姿も見える。④輸送機を待つ積み荷。手前の砲はソ連製の85ミリ師団砲で敵からの押収品。⑤ダナン航空基地の東にあったチャイナビーチとマーブルマウンテン基地を捉えた上空写真。⑥積み下ろし作業中のC-130輸送機とフォークリフト。C-130は中型輸送機として大成功をおさめ、現在でも生産が続けられている。



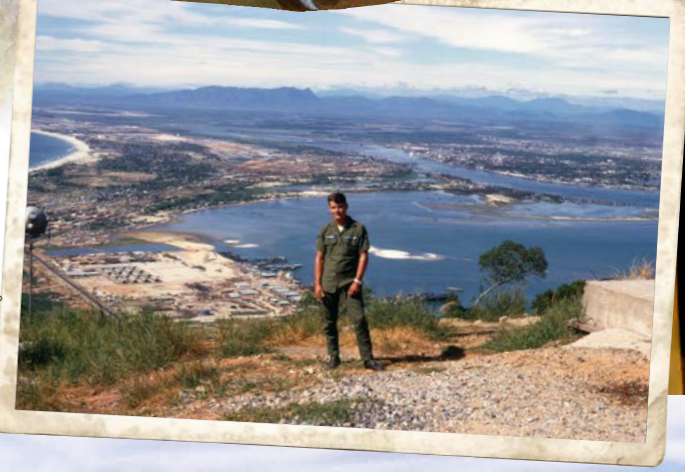
2機のF-4ファントムIIがたたずんでおり戦地とは思えないほど穏やかな雰囲気が感じられる写真。ダナンには陸海空、さらに海兵隊とあらゆる所属の航空機が集まっていた。



A-1スカイライダーの cockpit にはパイロットの姿が見えるが主翼の兵装が見当たらずかなりスッキリした印象を受ける。帰投後の写真だろうか。



修理のため後方に送られるUH-1。側面のマーキングで空中騎兵部隊の所属とわかる。ノーズアートはアニメ「ルーニー・テューンズ」のヨセミテ・サムだろうか。



岩を降りるとリゾート地として有名なチャイナビーチとダナン航空基地の東にあったマーブルマウンテン基地が姿を現す。マーブルマウンテンには海兵隊と陸軍の航空隊がいた。

ダナン湾とチャイナビーチを見渡すモンキーマウンテン通信施設にあった有名な岩「BOOM BOOM ROCK」の上に立つゲリー。ひととき大きく描かれたピースマークの落書きが世相を感じさせる。

RA-5Cウィジランティ偵察機がクレーン車で運ばれている。トローリングトラクターを使わないところを見ると、主脚にトラブルがあるのだろう。高速を活かして北ベトナムまで偵察飛行を行っていたこの機体は損耗率が非常に高かった。



第15空軍中隊のオフィス。兵士たちはTシャツにベースボールキャップというラフな姿でいかにも基地内らしい光景。

# サイゴン物語

## Saigon Memories

### 不死鳥ロンビエン橋

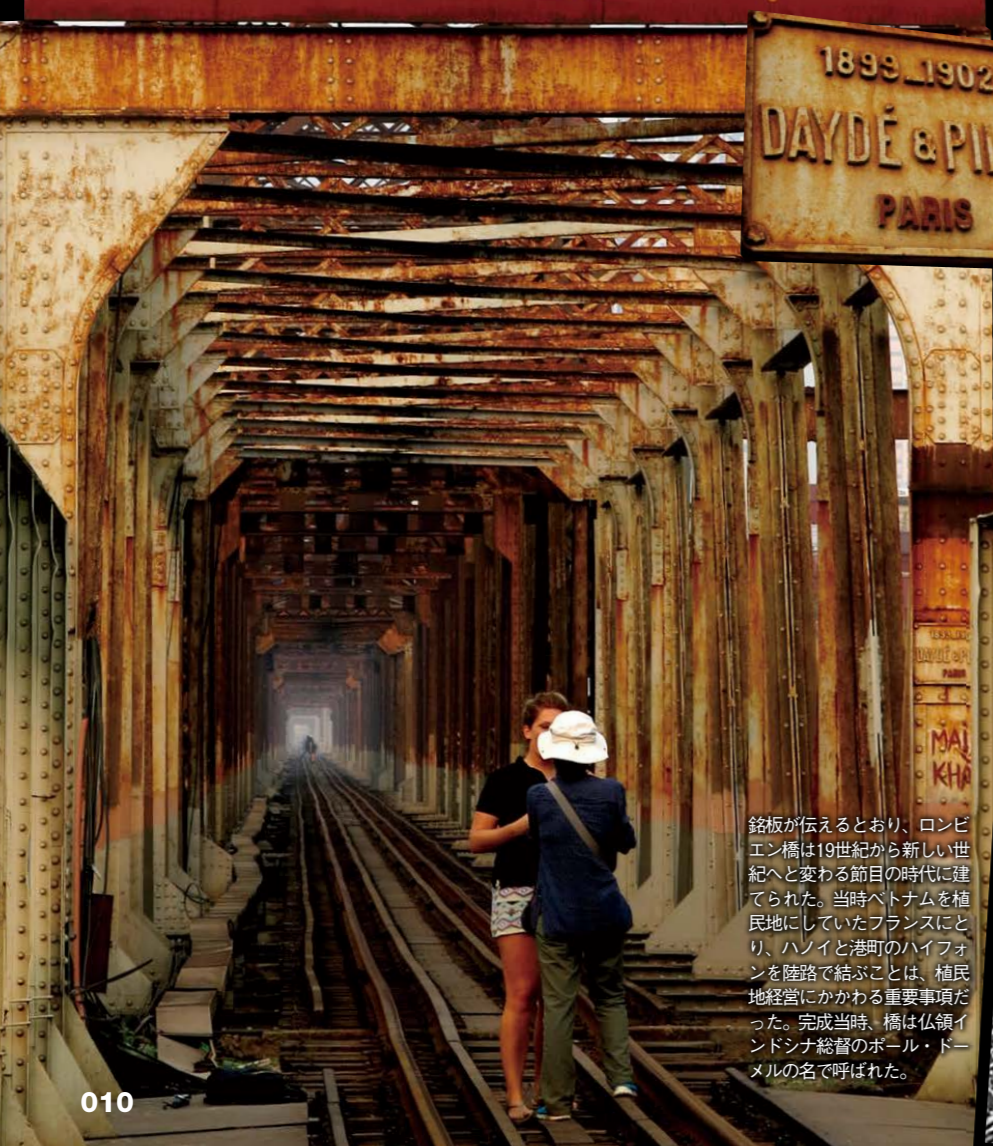
橋は繰り返し米軍の攻撃目標になってきた。その度にダメージを受けたが、ふたたび橋は架けられた。だが橋脚が崩れ落ち、橋はソクイ川に沈む日がきた。1972年5月米空軍のF-4ファントムが、橋に攻撃をかけた。ウルパックの名を持つ第8戦術戦闘航空団がレーザー誘導爆弾を確実に橋に命中させたのだ。そこから橋は不死鳥のごとくよみがえり、半世紀後の今も列車を走らせている。

文/コンバットマガジン編集部  
Text/CM Editorial Staff  
写真/今井今朝春、WPPコレクション  
Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

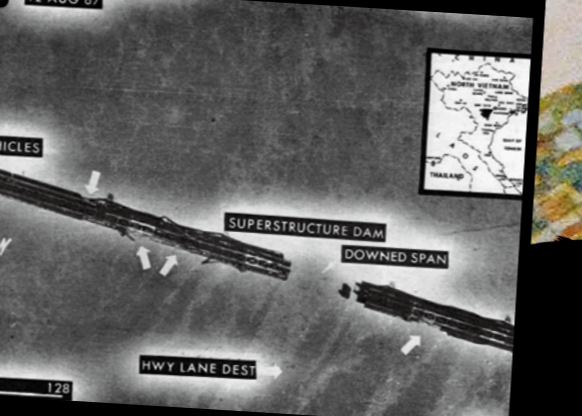


# Long Bien Bridge in Hanoi

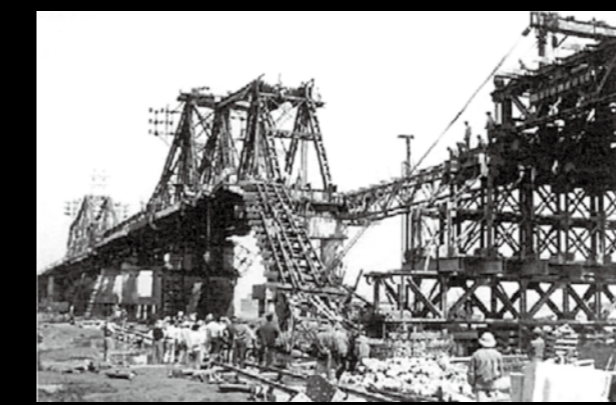
AN TOÀN GIAO THÔNG  
LÀ HẠNH PHÚC CHO MỌI NHÀ



銘板が伝えるとおり、ロンビエン橋は19世紀から新しい世紀へと変わる節目の時代に建てられた。当時ベトナムを植民地にしていたフランスにとり、ハノイと港町のハイフォンを陸路で結ぶことは、植民地経営にかかわる重要事項だった。完成当時、橋は仏領インドシナ総督のポール・ドームルの名で呼ばれた。



1972年にDLスミス少佐率いる第8戦術航空団が、長年の攻撃目標としてきたポール・ドームル橋に攻撃をかけた。この時タイのウボン基地を飛び立ったF-4ファントムによる「ウルパック」は、レーザー誘導爆弾を積んでおり、これが橋を寸断するのに威力を発揮した。  
Drawing/USAF



米軍による攻撃後の評価写真によれば1968年2月14日の攻撃では、40フィートに渡って橋が崩落していると報告されている。ベトナムの人たちはこの橋をロンビエン橋と呼ぶ。その意味はベトナムの建国神話にもつながる「龍が躍る」という意味である。  
Photo from Vietnamtourism.org



ベトナムの人々がロンビエンと呼んでいる橋は、1899年から1902年にかけて建設された。全長1682mの鉄道橋は、完成時には19本の橋脚で支えられていた。ハノイを流れるソクイ川（紅川）に架けられた初めての鋼鉄製の橋だった。フランスがベトナムを植民地として支配していた時期である。設計と建設したDayde&Pille社の銘板は錆びてはいるが今も確認できる。ただし米軍の記録にロンビエン橋は見つげられない。米仏ではあくまでもポール・ドームル橋だからだ。ドームルは橋の建設当時、インドシナ植民地で総督を務め、後に仏大統領になった人物である。



# GAS BLOW BACK FNX-45 TACTICAL

東京マルイ

Photo & Text by Tomo Hasegawa  
 ©東京マルイ 03-3605-3312  
 http://www.tokyo-marui.co.jp/

東京マルイ最新  
 ガスブローバックハンドガン“FNX-45”。  
 各種アクセサリと組み合わせ自由。  
 最新戦闘拳銃のスペックを完全再現。  
 ウェポンシステムの中核となる1挺。  
 ついに登場!



## 期待の新製品!

期待のニューモデルがついに発売!

東京マルイの「FNX-45タクティカル」である。

この銃はFN社のフルスペックオート。ハンマー露出タイプの、セミ&ダブルアクションにマニュアルセフティを備えている。

実銃は2005年にUS SOCOM (合衆国特殊戦術合軍) で行われたM9の後継制式採用拳銃のトライアル「J.C.P.P (ジョイントコンパクトピストル プログラム)」向けに、2007年にFN社で開発された1挺だそうだ。そのトライアル内容が興味深い。

- ①サブレッサーが装備可能
- ②ピカティニ規格のアンダーマウントレイルを装備し、ライトやレーザーサイトが装備可能
- ③デコッキング機能、マニュアルセフティ、マガジンキャッチ、さらにスライドストップまですべてが左右から操作可能

マズル部分には16mm正ネジのスレッド(ネジ目)が刻まれている。使用しない時はカバーで保護。実銃の仕様をリアルに製品化。

- ④グリップサイズが変更可能
- ⑤オプティカルサイトが使用可能
- ①、②、③のサブレッサーやピカティニレイルの装備、操作系の仕様などから、'90年代初頭に行われたSEALS用の戦闘拳銃トライアル“Mk23 SOCOMピストル”を彷彿させる。が、③、④は兵士の体格や好み



## FNX-45 Tactical

- 全長:220mm ●重量:830g(マガジン装着時)
- 装弾数:29発 ●価格:未定
- 発売時期:4月~5月予定



ピカティニ規格のアンダーマウントレイル。その中にシリアルナンバーが表記されたプレートを生で再現!

# 2019 SHOT SHOW

## Part.2

Photos & Text by Muneki Samejima

今月も前回から引き続き、2019ショットショーの様子をお伝えしたい。  
今回は、会場で僕が独断と偏見で選んだもの、  
目に付いたものや目新しい製品を中心にご紹介していこうと思う。

NATIONAL RIFLE ASSOCIATION OF AMERICA



NRA (全米ライフル協会) のブースでは、映画で使われたプロップガンの展示が行なわれていたのでご紹介しよう。

2つのモデルともベネリのファクトリー出荷状態ではなく、TTI社のカスタムモデルとなる。TTI社は先月号でも紹介したSTIにもカスタムを行ない、劇中では主人公の愛銃として登場する。ホルダーに付いたショットシェルから装填を行なって撃つシーンが劇中でも確認できる。

ショットシェルの挿入口は加工が施され、大型化されている。M2の方がより大型化されており、素早く装填ができるようになっている。



### Benelli

こちらもベネリ社のブースで展示され、多くの人に注目を浴びていた映画「ジョン・ウィック」シリーズで使用されたプロップガンのベネリM4とM2だ。



このM2のカスタムモデルは、夏に公開の第3弾、「ジョン・ウィック: チャプター3 - バラバラム」に登場するわけだが、こちらのモデルは、もともとは完全に3ガン・マッチ用の競技用カスタムとなっている。これらのカスタムモデルは内容にもよるが、すべて込みで\$3,000くらいは掛かる高級カスタムとなっている。

そして、こちらがブルース・ウィルス扮する主人公のジョン・マクレーンが使用したベレッタM92F。この個体は、「ダイ・ハード」だけでなく、「リール・ウェポン」の劇中でも使用されたものだ。劇中ではタフに使用されていたが、やはり本体には数多くの傷が入っている。



映画「ダイ・ハード」の劇中でアラン・リックマン扮する悪役のハンス・グルーバーの愛銃として存在感を出していたのが、こちらのH&K P7 M13だ。実際に30年以上前に映画の撮影で使われた実物そのものだが、状態はキレイだ。

### NRA